

博物館ボランティア養成セミナー（11）

やってみよう！博物館ボランティア（意見交換）

人文学部 池田哲夫

このセミナーの最終回を担当いたします池田と申します。専門は民俗学で、5年前まで、昭和57(1982)年に開館しました佐渡の両津市郷土博物館で学芸員をやっていました。20数年間博物館に関わってきましたが、博物館の基本設計から建築計画、博物館の資料収集、展示構想、建築後の運営に至るまで一通りのことを経験はしてきました。そこで感じたことは、高い理念を掲げて博物館の構想を練り上げても、建設後はなかなかその思いどおりに事業展開ができないということです。特に来館者と博物館との意思の疎通をはかることは難しいということを感じてきました。

私にとって、当時、博物館の建設構想に携わるのは初めての経験でしたから、いろんな方のご意見を伺いながら構想を練ったつもりだったのです。しかし、財政基盤の脆弱な市立の小さな博物館でしたからなかなか構想どおりいかず、施設設備から展示、運営などそれぞれに不備な点が沢山あるということを感じ、なかでも館の運営面において来館者の声をどのように反映していくかということが、館の姿勢として大事だと思いました。絶対人口の少ない島のことから、リピーターをどのように確保するのが博物館としての重要課題でした。特にボランティアの方々との交流をとおして館の活動を展開していくのは大事な事だと思っています。

ボランティアというと自己実現のとか、あるいは自分らしさを発見する場所だとかいろいろ言われています。私のささやかな経験では、そうした場で感じた意見を博物館の方へ伝えても、ややもするとボランティアの方の意見はいいっぱなしの形になってしまって、先ほどどなたかアンケートに書きたいことがいっぱいあるとおっしゃいましたが、その総てが反映されていくわけではありません。意見が取り入れられ実現される体制を博物館としても整えていくことが大事だと思います。かつて意見を受ける立場にいた私のささやかな経験からは、お寄せいただいたご意見に対してどのようにお答えしていくかということが、ボランティアの方々の博物館への参画を促す大事な付き合いの要件だと考えています。

たとえば展示に対して皆さんの率直な意見を展示評価という形で受け取り、それをどのように反映させていくのか、そういうことが大変大事だと思います。また、博物館の運営とか活動を評価するということからもボランティアの方々のご意見というのは大事です。なぜかというと、よく一般の入館者の方からはアンケートをとりますが、意見としてはその場限りの印象的なものが多いのです。ところが皆さんのご意見は、実際に解説をし、館内を見渡し、直接来館者の言葉や反応を耳で聞き、反応を目で確かめて、その意見を私ど

もに伝えて下さるといふ、こんなにいい調査者はないと思います。たとえば、NHKの選挙前後の候補者に対するあのリサーチ力の凄さには驚きますが、正に皆さんはそういう役割もお持ちとだと私は思っています。

そういう意味でボランティアというのは、ここに参加されてただ単に展示の解説をしたり、入館者のお世話をいただくだけではなくて、入館者の方々の各種の反応を的確に捉えて、その声を館にアピールすることが非常に大事な役割だろうと思っています。皆さんのご意見が館の運営にいかにか反映出来るかということが、ある点で館にとってのささやかなボランティアの方々への御礼ということにもなるのではないかと思います。あるいは、それが将来大変優れた館の運営にも繋がっていくということになるろうかと思います。

そういう意味でも私にとっては、ボランティアの方は意見なき意見をまとめて意見をしてくださる非常に大事な方々だと思っています。この半年間、あさひまち展示館の運営に参加し、関わっていただきました皆さんから、先ず一言ずつご感想などをお聞かせいただきたいと思っています。

渡辺 私の場合はベースになっているものがないのですが、来館者というのは何かを求めてお出でになるわけです。自分に無いものを説明しろといわれても実際困って腰が引けるのです。

池田 でも逆にそういうことを機会に自分で学んで、学んだことを人に教えるということ、話をして教えるということは責任が付きまとうわけですから、そういう意味では猛烈に勉強されるのではないのでしょうか。

渡辺 確かに今まで知らなかったことなど多少は学びましたが、前回でしたか学生さんがこられて、声をかけられてお話しするつもりも無かったのですが、自分が知っている知識範囲のところでお話をしたら、何時勉強しましたかなどと聞かれたことがありました。それは丁度以前に関わっていたことに繋がっていたものですからお話が出来ました。その他のことになりまして、今回の講座でいろいろと教えていただいたことで本当に表立った形だけのものですが、試験前夜の勉強みたいな格好で今までやっていました。

池田 今のご意見の中で私は非常に驚くというか、やはりと思ったことは、ご自身の知っていることを聞かれたこともあったので、とくに深く説明が出来たというお話です。これは私どもには無いことなのです。私共は学問の世界で専門領域という狭い範囲のことは知っていますが、皆さんのように広範囲に見ていませんから、人を見て解説をするなどというのは難しいわけです。今のお話の中で自分の過去に知っておられることがあったので、そのことを中心にお話されたということは非常に有益なことです。それは人生の中で学び取られたことというか、ご自身の学んだ成果を発表になられて、まさにボランティアの方の適役だったと思います。今のお話は以前の自分の関りのあるところを聞かれたので、内容を深めて話すことができたという点が印象として残っている。自分に無いものを聞かれて困ることもあったが、何とかそれは自分自身で学習して答えることが出来るとい

うことでよろしいでしょうか。

渡辺 それほど立派ではないのです。

高橋（道） それほど突っ込んだ質問もありませんでしたけれども、やっぱり趣味とか知っていたものであれば、結構お答え出来るものがあると思います。

池田 趣味で学んでいたことが反映できたということですね。

高橋（正） 今回の講座を通して、例を挙げますと、入れ歯の歴史などは始めて聞いてなるほどなあと、今まで他の講座で聴いたことの無いようなことが聞かれたことが非常に良かったと思っています。それを聞きながら考えたことですが、何か展示してあるものについて、私共がこれはなんだろうと疑問を持ったり、誰かから聴かれてわからなかったりした場合、展示してある学部単位だけでもいいのですが、何か質問箱を受け付けてくれる組織といったらいいか、例えば、今の歯関係のことなら、歯学部の何々先生のところにいくように、質問箱に出せば回答していただけたらとか、そういうシステムがあるといいなという気がしました。

池田 そうすると、場合によっては、その展示についてはどの先生を訪ねたらいいということのを来館者にも伝えられるようなシステムがあるといいということですね。

高橋（正） あれば一番いいけれども、それが無理だと思ったら、代表者でもよくて、その先生から、専門の先生を紹介してもらうような形でもいいと思います。

池田 問い合わせの窓口をはっきりさせておくということですね。

高橋（正） もう一つは、展示換えとか、あるいは特別展などがあつたときには、僕らボランティア用の解説会を是非やっていただかないと、何か聞かれても返事が出来ないということですので、それをやっていただきたいと考えました。

池田 そうするとまず一点は質問に対する問い合わせの窓口を明確化しておく。概要だけでもいいから分かるようにということですね。二点目は特別展とか企画展に関してボランティア向けの少し詳しい内容の説明会を開く、というご要望ですね。

西田 講義の中で初回の飯島先生の博物館におけるボランティア活動は、こうなのだ、こういうふうにやらなければならない、ということを知ってびっくりし、非常に参考になったのですが、そうすると果たして自分で出来るのだろうかという自信がなくなるような気がしたのですが、その話が以降の講座の大変参考になりました。それといろんな人がいますし、これだけの狭い博物館ですけれども、いろんな広い分野にわたっているんで、これを全部吸収するということはなかなか出来ないんで、例えば私の場合ですと、人類史の部屋で考古学の絡みでの部屋のものであれば、ある程度今まで学習してきたことがかなり入っていますので、学生さんなどから少しくらい質問があつても完璧ではありませんが、ある程度ことは説明出来るような気がします。やっぱりそれぞれ得意分野というか、そういうものが個別に出てくるのではないかと思います。

もともと、この同じ時期に五十嵐キャンパスで、市民が受けてもいいという共通科目のテーマがたまたま「越後平野の成り立ちと人々の生活」というのだったので、ここに展示

してある理学部の地質関係のお話がありまして、その後半は橋本先生の考古学の絡んだお話で、そういうものとリンクしていましたので、非常に参考になりました。こういうのもボランティアとしてここに展示してあるものを、一回だけの講座ではなかなか身につかないので、これからも企画展もやるということなので、企画展のときに、先ほども意見が出ましたが、ボランティア向けに企画展の内容をもう少し突っ込んで解説していただいて内容をある程度得たいということが一つです。それと必ずしもこの展示だけではなくて、展示にかかわったもので、そういうものを解説していただければと思うのですが。

池田 今のお話だと初回のボランティアについての心構えの話にあうように心がけたつもりであり、そしてそれを受けて活動したつもりである。その中で人類史の中のものであれば、大体分かるけれどもそれ以外のものは分からなかった面もある。したがってボランティアといえども得意分野が生まれてくる。そういうことが確認できたし、それから越後平野の生い立ちなどに見るように、展示というものとリンクさせた特に企画展などにおいては、ボランティア向けの内容の深い解説会や学習会を開くことを要望するというご意見でしょうか。

高橋(道) 工学の講座のときにここで実験をやりましたが、ああいうのをやったらかなり若い方も来るのではないかなと思います。そういう意味で、市民や学生などと一緒に説明しながら実験などをやっていただければ結構広く知れるのではないかという気がします。それと本物、偽者の絵の展示がありましたが、ああいうのもちゃんと説明が前もってボランティアにも教えてもらっていたらもっと面白く説明も出来るのではないかと思います。

池田 先ほどのご質問に関連して、工学の実験みたいなことをもっとやると一般の人にも興味深いものになると言うことでしょうか。

高橋(道) こういうものをこうしてこうなったのだよと、いろいろありますから一般に説明するにも非常に大事だということです。

池田 本物、偽物に関連して博物館では複製品としてのレプリカを作ったりします。複製品についてももう少し製作上の裏話なども含めて話を聞いていたらもっと面白く説明が出来ると思いう意見でもありますね。

高橋(道) 今度の佐渡の物の展示を楽しみにしています。

池田 今の話に関連して、現在長岡の県立歴史博物館でレプリカに関する展覧会をやっています。レプリカは、普通は実物資料の一次資料に対して二次資料などともいいますが、レプリカには有用な意義もあり、からくりもあるわけです。その意義とかからくりをもっと詳しく説明すべきで、そうするともっと面白くすることが出来るということですね

橋本 大変失礼な言い方になるのですがけれども、私は最初からボランティアは考えの中になかったのです。今回、私は勉強させていただく目標をあくまでも自分のやっていることの基礎学習ということで考えていました。最終的に新潟の文化と自然環境というものを自分なりに習得していくというか、そういうことで基礎から勉強していきたいと思っていました。それと人から教えてもらうということではなくて、自分で何らかの課題を見つけて

こつこつと勉強するのが本来の学習だと思うわけです。そういう意味で博物館に関して、それに対して私は具体的に今回は何も出来なかったのですが、そういう勉強の中でもっと新潟県というのでしょうか、それでは狭いのですけれども、新潟県というのは何時生まれて、初期段階の人口は大体どれくらいなのだろうかと、非常に基礎的なものをもっと分かりやすい総括的なコーナーが作れば良いと思います。それと先生方のプロフィールといえますか、どういう研究や勉強をされていて、どういう学会に発表されているか、ホームページなんかに出ていると思うのですが、そういうものをこういう展示の一角で発表になって、個別の見学者も利用できるようなそういうものが出来るようになれば面白いのかなと思います。それで我々はあくまでも、専門家ではありませんから少しでもそういうものに携わっていくとすれば、具体的な専門の各先生方と直接お話しできるというような案内があってもいいのではないかとも思います。ちょっと大雑把にお話しましたが、私の参加はあくまでも自己学習が目的です。

池田 今のご意見のまとめとして、自分自身が勉強することが一番の目的なのだからそういう学習のための支援ということも必要ではないかというご意見として承っても宜しいのでしょうか。自分の興味関心のあるところで、そのことへの質問と、その質問に答えるべきことについてもっと分かりやすくして欲しいということですね。

橋本 個別にいろいろ講義の先生方から、お話しいただいた内容の中では、日本画で、私はいい加減に今まで考えていたのですけれども、ところが先生に伺いましたら、非常に横写というのでしょうか、日本画というのは画材とか、絵の具とかまで自分で作っているというようなことは参考になりました。個別に先生方から教えていただいた内容に関しては大変参考になっておりました。

池田 今個別に教えていただいたという話をされましたけれども、会場に来られた担当の先生から直接話をお聞きできるというのは、確かに感激しますね。

柝倉（聞き取れず）何のお手伝い出来るかなということを考えています。

池田 美術科の先生への要望として、いろんなジャンルの展示を企画して欲しいということ、そしてボランティア用にやや詳しい解説をしてほしいということですね。

岡 橋本先生の拓本の実習を経験しまして、来館の方と一緒にやりましたら非常に喜ばれました。あんまり楽しそうだったので他の人がお友達だろうかと思ったそうですが、自分では出来ないと思っていたものが出来たということで、喜んでいました。その後で第一回の飯島先生の講義を聞きましたら、ボランティアの良さは相手の反応を見てするものだというお話がありました。

池田 確かに、説明しないと分からないものほど、ワンポイントアドバイスとでも申しましょうか、ボランティアの方から、見学者の反応を見ながらさりげなくおすすめ頂くことは効果的だと思います。これが難しいのですが、さりげなく説明するというのは、入館者にとっては非常に大きな力になるのです。それから、リピーターとして博物館の世界にどっぷりとつかってくださるきっかけにもなるわけです。大変良いことをしてくださった

と思います。

渡辺 キャプションにもう一言何か付け加えてありますと説明しやすくなると思います
が。

高橋(道) 逆に学生さんの勉強になるのではないか。一緒にボランティアでいろんな説明
したときに、学生さんに聞いて話をしたら凄く参考になるのではないか。例えば実験なん
かも、将来先生になっても必然的にやれるのではないか。一緒にいるボランティアの人も
参考になる。お互いに交流できるのではないかという気がします。

池田 学生自体も参加するという形ですね。

キャプションを作るのも大変なのです。私は以前博物館勤務のとき、キャプションの種
類というかタイプを大体三つ位に考えていました。一つは、時間がなくて駆け足で見て行
く人のために、ごくおおざっぱというか概略的に書いたもの、二つ目は少し余裕がある方
の場合用で、興味を持って少し読めるという程度の情報を入れたもの、三つ目はじっくり
見て下さる方用ということで、これはやや詳しく情報を書くというようにしてきました。
その文章も大体小学校の高学年が理解できる程度の言葉遣いで書くということ、キャプ
ションの文字もこの場合は限られた大きさのものですから仕方ないのですが、普通は1
メートル位離れても読める程度の文字の大きさの選択をしてきました。キャプションの形
や大きさにもその館独自の考えが反映されています。

この展示館の展示資料はほとんど全部が本物だということ、これがこの館の強みだと思
います。この展示館の目玉は何かということをお先ずボランティアの方々がどのように認識
なさっているかが大事だと思うのです。ボランティアの方がご覧になって常設展示はいか
がでしょうか。

高橋(正) 変えなければ駄目ですね。変わらないとやっぱり来館者が来なくなりますね。

池田 展示替えをもう少し考える必要があるということですが、展示替えに伴ってボラン
ティアの方々にもそれに合わせて勉強して頂く必要も出てきます。

高橋(道) お互いに勉強だから、そういう時に学生さんなんかも一緒にいて勉強していれ
ば、説明をすることができる。

池田 ボランティアの方々がこうして館につめてくださっていても、来館者が少ないとい
うことでは張り合いも無いですね。それは私も身を持って体験していますし、そのことは
もっと入館者増を目指してボランティアの活用をとということにもなりますでしょうか。

西田 これは一般的なことですが、常設展というのはあんまり変えないのですね。時々
新しい発見があったとかということで、それを補うこととして、企画展でいろんなことを
やるということをやりますよね。その場合にこれだけの規模だけでは何が常設展の目玉か
ということ、企画展を順次やれるのかという、ここ2年間くらい見てきますと、一部やっ
ていますが、他の所はやっていないでしょう。考古学関係は移動博物館を六日町でやっ
たり、今回の佐渡との交換展示でしょ、それ以外はあんまりないですね。企画展示室が空
期間があるのです。その間を利用して拓本教室の作品を8月から半年位この間までやって

いました。そういうやれるものをやれば、逆に企画展示室は狭いけれども、もう少し各学部がいろんな資料を持っておられるはずです。各学部ではそういうことをもう少し狭いながらも企画展示室を大いに活用しなければならないと思います。

池田 企画展示室の有効利用を考えなさい。それにあわせてボランティアの方々も勉強するし、逆に勉強の場を提供するよということですね。

西田 特に一般の博物館と違うのは、大学という教育研究機関の中でいろんな資料があるはずですよ。その一つとして50周年の時に図書館で展示をやりましたが、あのときの図録を見ても、こちらは縮小してまとまっているということは、大学の中ではもっと資料があるのでそういうものを順次企画展示でもやって、来館者に見てもらおうというように、そういうふうに公開していけば、人は何回も足を運ぶのではないか。リピーターがいないと1回で終わりということになる。

それともう一つは、私はたまたま、この来館者が何人あって、極端の場合は1人もないということがあったと聞くのですけれども、その辺はそれに対してのPRも勿論やっていかなければいけないし、それから学内でも学生さんに、学生さんは1万人くらいいるわけですから、1年間に割り振ってみても、そんなに少ないものではないか。ということは学内でもPRが足りないのではないかと思います。

池田 館の活用という点で、学生にも来館の機会を作るということですが、学生にもレポートを課したりボランティア活動に参加するような方法を考えるよということですね。

西田 それは顕著に現れます。この度の講座に参加したら、ある先生が必ずここに来てレポートを書けということがあったから、学生さんがどっと来ました。そういうことで学内でもやって欲しい。

池田 そういう機会がないとなかなかここには来ないかもしれませんね。学生の来館者ももっと増やさなければいけないと言うご意見ですね。

西田 そしてそのためには内容もそれに応じたものにしないと、学生たちになんだこんなものかということになります。

高橋（道） 学生も説明を受ける気持ちで、交代交代で来てもらった方が凄く参考になると思うのです。

池田 企画展示室の有効活用とそれに伴うボランティアの方々の勉強の機会を増やすということ、合わせて学生の動員も考えるよということですね。

男性A 私はそんな高邁な気持ちで来たのではなくて、ここにこういう立派な施設があるということが分かっただけでも、儲けものだったと思っています。始めの1回2回でも出ればと思ってきたのですが、先生方のお話に引かれて最後まで来てしまいました。展示されているものを見ていて、レプリカでもいいのですけれども、やっぱり自分で触って見れるというのが大事なのだと思いますが、古いものですと触ると壊れるというものがあるので、中のほうがどうなっているのか、ひっくり返して見たいと思うものもありまして、レプリカでもいいから触って見れたらと思います。それと展示されているものと現在の最先

端のものとのつながりを、直接並べなくてもいいですけれども、分かりやすくしてほしい。ここに展示場があるということをもっと知られるようにして、私も出来る範囲でお手伝いが出来ればと思っています。

池田 ぜひお願いします。

男性B 今回の講座は展示品に限ったものでしたが、それ以外のものも見方もお願いしたい。

池田 私は展示資料を人との関わりで考えるようにしています。そうすると人を理解するためにはいろんな視角が生まれてくると思うのです。人文学部のものにしてもそういう見方をすると、そこには人々の生きるための工夫が読み取れると思うのです。これはあくまでも私の見方ですが。

岩間 ボランティア活動をやってみたいなと思っているのですが、古文書は何処にあるかと思って来たらここにもありましたし、農学部の展示でこれだけあるということが分かりました。1階の展示室には鉱物の関係資料があって新潟県にはかつて鉱山が沢山あったということが分かりました。基本的には宝探しの感じで来ていて、まだどれか分かりませんが、どれも興味のあるものでして、この本当の宝物というのは多分橋本先生の古人骨だろうと思っていますけれども、人骨は不気味な感じがして取り付き難いという感じがするものですから、橋本先生は触ってもいいと言われたのですが、触り難かったのですが素直の気持ちで慣れればいかなと思っています。

池田 確かに触ってもいいといっても、人骨などは触るには抵抗があるかも知れません。日本の博物館のなかには「ハンズオン」などといって手にとって見る事のできる展示手法をとっているところがあります。例えば新潟県立自然科学館のように資料に直接手で触れてみたり、実験に参加したりしてみる事のできる展示などがその例です。この場合にもハンズオンというご意見でしたが、出来るだけこのハンズオンの手法を取り入れるようにというご要望があるということですね。

岩間 去年農学部の展示にあったものが、農学部に行ったら本館の玄関の展示場にあったのですが、そのように各学部は独自の展示場をお持ちなのかなと思ったのですが。

池田 そうでもないと思うのですが、例えば人文学部などですと人文学部単独でも展示室を持っていて、新しい研究成果などはそこでも公表しております。お問い合わせいただくとホームページ等でも紹介しておりますのでご覧いただけたらと思います。

確かに各学部には宝が沢山あると聞いております。本格的な大学博物館にまで立ち上げてどんどん展示していくことで、さらにボランティアの皆さんの活躍する自己実現の場を提供できるのではないかなとも思っています。

誤解を恐れずに申しあげるならば、宝というのはそのままでは単なるモノですが、考え方によっては宝物にもなるものです。その宝にするかモノにしておくかというのは、誰の力によるのかというのはここにお出でになる来館者の方々の意見を反映するボランティアの方々のお力添いにもかかっています。

ときおり、私は、昨日までガラクタ扱いにされていたものが今日から文化財という時代だというふうに学生に言っています。その一番いい例が、私が関わってきた両津市郷土博物館の魚捕りの道具です。なかばガラクタ扱いされていた魚とりの道具を集めてコレクションとして体系立てたところ国の重要有形民俗文化財の指定を受けました。そういう時代なのです。

アンケートにしてもそうです。アンケートというのはアンケートで終わってはいけません。アンケートの結果はどのようにすばやく館の運営に反映するかということを、今度は運営する側が考えなければいけないのではないかと思います。そのためには情報が必要で、その情報は皆さんしか持っていないのです。担当者がここに来て、来館者の反応を見ているわけではなく、反応を見ているのは皆さんです。ぜひご意見をお聞かせ下さいというのはそういうことにあるのです。

ボランティアというのは、博物館側から見たら、それは宝物なのです。宝物探しを一緒にしていただく大変大事な人材なのです。私はそれがボランティアの方々だと思っています。お話を伺うと自己学習のために来たのだけでも、だんだん少しボランティアに傾いてきたという方もいらっしゃるようですので、ぜひ応援いただければと思います。

高橋（正） この魅力の一つは、展示物にも当然あるわけです。もう一つは先生方からいろんな話を聞きながら、その先生方に質問したりしながら関係を深められるという場というのが一番大事なのではないか思います。それによって、また周りの人たちがここに集まってくるということも出てくるのですけれども。新潟市にやがて博物館がオープンするわけですが、そんなことを考えるとこの博物館の特徴というは何だろうかと思うと二つあるように思います。一つは最先端の学問の話しができるということが一つの魅力です。それで先ほどの直接展示を通しての話でもいいし、今回みたいにリレー方式でやってもいいし、そういうパターンの話、講座の組み方が一つあります。もう一つは越後でもいいし、新潟でもいいのですが、例えば「新潟の内水面と人々の生活」というような一つのテーマだと、いろんな学問の先生が付かれるわけです。池田先生でしたら民俗学の立場からつかれるわけでしょうし、そういう一つのテーマを決めての話もいいのではないかと、その二つの方向の話が考えられるわけです。あるいは「新潟の天変地異と人々の生活」とかですね、先ほどどなたか鉱山の話がされたけれども、「新潟の鉱山の移り変わり」とか、自然科学と人がどう関わっているのかというようなテーマでやっていただくと非常に皆さん集まりやすく、また大学の特色あることを生かせるのではないかと思います。そしてそれを出来るだけ新潟日報の夕刊に紹介欄がありますが、それに載せていただくとか、テレビでも取り上げてもらう。そうすることがここに人を集める大事なことではないかと思っています。

池田 新潟に因んだ話題を豊富に盛り込んだ講座、あるいは展示などを企画するということで、その中でそれぞれ学ぶ場所を求めて学んだ成果を入館者に返していくという皆さんのご意見は貴重だと思います。

今までのお話ですともう少し大学の特色を生かした展示を考えなさいとか、それに併せて最先端のものと人とのつながり、その両方を出して欲しいということ、とにかくボランティアとしたらそういう企画展なり特別展を踏まえてそれぞれが学習をして、その上に反映させていくのだということでしょうか。そのためにはボランティア向けのそういう専門の学習会を開くということが大事なことだというご意見ですね。

館の受付業務を担当されている阿部さんがおられるのですが、ボランティアの方々に逆にお願いたいことなどありませんか。

阿部 この館は、ボランティアの方々に支援されている面も大きいということでしょうか。

池田 もちろん、阿部さんが受付業務や来館者の方々への解説にもあたっておられる訳ですが、ボランティアの方は解説者とでも申しあげたらよろしいのでしょうか、むしろ館というものをとおして地域とのつながりをつくるということでもボランティアの方々の活躍の場があるのではないのでしょうか。

ボランティアの方々にはここを学習の場にしていただきたいし、学習の成果の反映も期待しています。地域の方々の持っている力、それがボランティアの皆さんだと思っています。その地域力が高まることでボランティアの方々も地域もよくなるわけです。そういう意味でこういう場所が必要だろうと思います。

それからボランティアの方から質問のありました深く答えられない場面に遭遇した場合、どの先生にたずねたらいいのか、その窓口を設けてもらえないかというご意見がありました。

阿部 その点なのですが、一つの独立した機関が無い限り、私は大学の本部のセクションの人間なので、何か問い合わせが来たら今の状態からしたら、「問い合わせがあったのですけれども」としか言えないのです。それで特に熱心な来館者の方もいらっしゃって、そういう方は非常に歓迎しているのですが、その質問に即答できなくて後で手紙を出したこともあります。ある意味では嬉しくある意味では困るということがあります。それは鑑定をしてくれということがあって困ったのですが、そういうのは先生方も依頼を受けた場合に本当にその人が知りたいのか、あるいはその価値を知りたいのかいろいろあるらしいのですが、そういうのは非常に扱いに困るのです。ここに何か物を持ち込んで見て欲しいといわれても、ここではそれに対応できないのがご理解いただけないで扱いが困るので、そういう来館者は扱いが大変だと思います。

池田 難しいですね。今度、橋本先生にこの展示館へ持ち込まれた資料に関する問い合わせをどうしたらよいのかおたずねしてみます。

阿部 今の状態だったら、橋本先生に話をするしかないのですけれども、橋本先生お1人では大変な話なので取りあえずはそういうことでやっていくしかないのです、私の前任者はどういうふうにやっていたのか、逆に聞きたいような感じがあるのですけれども、そういうところがよくわからない。今の所多少増えてきているけれども入館者数がまだ少ないのです。そういったこともあって、本当に知りたいという人に対しては答えたい。

池田 胸のうちの苦しい立場をお話してくださいましたが、橋本先生に展示物について質問があった場合、何処へ問い合わせたらいいのか困っていたということをお伝えしておきたいと思います。

西田 議論することではないのですが、私たちもここで約1年間ボランティアをやってきて、しょっちゅうここで橋本先生を交えているんなことをやってきた感じなのですが、ただその時に国立大学という官庁の規制の中で動きづらいところもあるなあということを感じました。この講座の中でも時折お話の中にも出ていましたけれども、今度4月から法人化になるのですが、そうなったときにここは何か変わることがあるのですか、それとも従来どおりなのですか。

池田 今のところ全く私などには全くわかりません。

西田 規制緩和もされることもあるだろうし、逆にまた新たな制約も法人化して生じることもあるだろうし、その辺がまだ全然詳しいことは分からないようですが、ここは週3日しか開館しないのは何故なのですか。

池田 それは予算の関係もあるのだと思うのですが。

西田 そうなると、私は国立大学というこうした公立の施設として一般市民に、ましてこれから総合博物館の設立に向けているそういう大事な時に、火、木、土しか開館しないというのは意外です。見たいけれども入れなかったということをしょっちゅう聞くのです。それとやはりそういう公的機関で週に3日しかやらないのだというのは、たとえ1人だけ来館者が来ても僕はオープンすべきではないかと思うのですが。そのためにはいきおい予算があると思うのですが、大学の施設のことで週3日を5日にしても人件費が問題になるのか、その辺が例えば僕はむしろもちろん金の面もあるが、今度法人化になったときにどう対応されるとか、今までの従来どおりなのかということが気になります。市民の中にそういう声があるということをおくります。それじゃ来る人が少ないのではないかと、これを大学当局の人は言うかも知れませんが、しかしやはりこういう施設は週、時間外のことは別にして、ちなみに此処も加入している県内の博物館協議会の約90館ぐらいありますが、それを全部調べたのです。週3日しかやっていないというのはここしかないのです。

池田 以前、市内のある私立の美術館の土日休みが取りざたされたことがあったと思います。

西田 それは休みが週に2日でしょう。私立では季節によって休んでいる所はありますが、公的なもので週3日というのは市民の中からそういう声が出てくる。それが予算だけの問題であればその位のことはこれくらいの大きな組織の中だったら無理が利くのではないかと。

池田 私には分かりませんが、これからは予算的には厳しくなるのではないのでしょうか。

この館があるということ世間の声として、ボランティアの方々がどこかで訴えていた

だくのも方法だとは思いますが。

西田 そういう話をいくつか聞いたことがあるのです。

池田 一つの声が二つとかになってくるのです。そういう意味で皆さんの意見があるというところで法人化ということは市民の声も聞くということでしょうから、そういうことをぜひどこかでご発言いただければと思います。

宮本常一という全国に民俗博物館の建設をアピールした先生がいて、こういう施設というのは道楽息子を抱えたつもりでやらなければ駄目なんだとよく言ったものです。ところがその道楽が出来ない時代になったのです。ですからこういう文化施設は道楽が出来るようにぜひ皆さんの声を高めていただきたいと思います。

昔だったら道楽息子だと思ったのが、そういう人の考え方はなくなってきましたから、一つの声が二つ、三つになっていくことを期待してぜひ機会があったら、やっていただきたいと思います。

ご承知のようにここは元放送大学の施設がありました。それが空くということで当時まとも役をされておられた芳井先生や橋本先生をはじめ、関係の先生方が頑張って何とか展示施設が欲しいということでここを確保されました。将来の夢は、ユニバーシティミュージアムなのですが。

男性 国立の総合大学でこんなに小さな展示館というのは悲しいですね。

池田 私などには何の力もありませんが、とにかくボランティアの皆さんの熱意に支えられてこうした施設の盛り上がりがあるということ、私も機会があるごとに訴えていきたいと思います。「これだけ反響があるのだぞ」ということが武器になると思います。それだけの内容というのはこの館にはあると私は思っています。本物の資料の持つ良さというのはこの展示館の強みです。皆さんのお力でこの館がこれからも運営できるだろうし、是非そういう豊かな知識をお持ちの皆さん方にご活躍の場としてここをお使いいただければと思います。

時間を超過しましたが、足元の悪い中ご参加頂き、たいへん貴重なご意見をお聞かせいただきましてありがとうございました。

(終わり)